

と南蛮鍛冶の技法を取り入れたものと伝えられています。現在も天草各地で約九業者が農耕用器具や注文品の製作を行なっています。

(ハ) 木工品

川尻桶は四百年の歴史を持つています。江戸時代には川尻の一町内全部が桶屋だったといわれています。現在は六軒の業者がすし桶、風呂桶などを主として作っていますが特に原木のサワラは吸湿性に富み、香りが良いのですし桶には最適とされ需要に追いつかない状態です。

(ニ) 和紙

八代の宮地和紙の最盛期は明治十八年頃で百二十余の製紙場がありました。その頃は製品の種類も多く奉書、半紙、美濃紙、すかし入り紙の高級紙などは県外にも広く知れ渡っていました。現在は唯一人の継承者が時折り漉くだけになってしまいました。

山鹿灯笼は、和紙と糊とでできた工芸品です。由来も古く七百年前頃から興ったと伝えられています。精密な細工だけに細心の注意と熟練した技術が必要のため大量生産はできません。現在市販されているものは観光土産品として作られたもので金灯笼、屋敷造り、矢ツボなどがあります。

(ホ) 郷土玩具

歴史の古い本県には、郷土玩具も古い由来を持ったものが多く作られて今日に残っています。土塊のような素朴な木葉猿は信仰の対象として千三百余年の来歴を持ち、球磨地方のキジ馬、花手箱、羽子板は平家の落人が作り始めたといわれています。このほか、おきん女人形、板角力、肥後ごま、お化けの金太、宇土の張子人形など、本県は郷土玩具の宝庫といわれています。しかし、こ

技術保存・消費志向調査など

伝統工芸の問題点と対策

(1) 後継者不足と技術の保存
伝統的民芸工芸品の問題点はいくつか数えることができますが、その内、後継者およびこれに従事する労働者の確保難という問題、それと表裏一体である技術の保存という問題が当面さし迫った重要な問題点であり緊急な対策を講じる必要がありますので、このことについて述べてみます。すなわち、技術習得に長年月かかる、労働環境が相対的に悪い、修業中は低賃金が多く、老後の生活保障も確立されていないなどの理由を挙げて、若年労働者が民芸工芸産産を敬遠してしま

す。伝統的民芸工芸品は、手作業を主とする

これらの製作のほとんどが一人、二人であるため後継ぎの養成が必要となつていきます。このほか、来民のうちわ、芦北の和弓、人吉の釣竿、花むしろ、肥後てまりなどが現在も作られています。山鹿の和傘、人吉、山鹿、宇土の和紙、肥後ロソク、小国の焼杉下駄、天草土人形などは今では姿を見ることができなくなつてしまいました。

伝統的技術によって生産されることが、その特質の一つとされていますが、後継者および労働者の確保難を背景とする熟練従業員の減少、近代的機械産業の進出による伝統的民芸工芸品と大衆との結びつきの希薄化、原材料入手難による代替品使用等により、伝統的技術が徐々に維持確保できなくなりつつあります。このため従業員の多くは十分な技術を身につける機会に乏しい粗製濫造に走る傾向が懸念されております。

(2) 後継者確保対策

これら問題点の対策として県では技術の保存とともに、技術の向上を図るため技術研修制度の拡充、技術習得期間中の

賃金の一部助成、労働環境改善のための設備建設に対する長期の低利資金融資、伝統的技術に対して誇りと重要さを認識させるための展示会、コンクール等の開催を行います。

(3) 振興対策の方向

民芸工芸品の最大の特質は伝統的な原材料を用いて、伝統的な技術によって生産することにあります。また生産工程の主要な部分を手作業によっていることも、その製品に独特の味わいを持たせる結果となっております。民芸工芸品の神髄ともいえるべき伝統性、手工性は今後とも守り、民芸工芸品に固有な「味わい」を確保していくべきと考えます。

さらに、消費者との結びつきを強める努力を惜しんではならないと考えます。従来、民芸工芸品に携わる人々は生産志向的であり、市場の開拓やその変化への適応という、いわば市場志向的な考え方に慣れていません。これには民芸工芸産産に属する企業が、ほとんど零細企業であるために資本力に乏しく、需要の変化を適確にとらえ、これに適応して、新しい商品、デザインを開発する方向での活動が十分に行なわれていないためです。

今後、前述の問題点も含めて、販路開拓、原材料の確保、金融対策など、国、地方公共団体および業界が一致協力して振興対策を実施していくことにより、はじめて民芸工芸品は、人々の期待に応えて発展できるものと考えます。

我が暮らし楽にならず

飽託郡天明町 角居輝康

子供が大きくなる頃は、我が家も楽になるだろうと思いつながら、農業を継いで二十八年間、子供は大きくなったもの。暮らして一向楽にならない。自分の息子には百姓を手伝う嫁がほしいが、娘は農家にやらない親が多い。今日の農村の暮らから親たちの気持ちも何かわかるような気もする。

こんな苦勞は自分たちだけでたくさんという声もわれわれ百姓にして何か考えさせられる。昔は水田一、二ヘクタールもって、十アール八俵もれば、春・夏二回は湯治にいつてゆつくり遊び暮せた良き時代であった。

現在、我が家の働き手は三人で、米販売代の四百万円と、野菜販売代五百六十万円の粗所得約一千万円をあげながら、生活は一向楽にならない。汗水たらして限りなき戦いを、このまま続けてよいものだろうかと考えさせられる。

このところ国は、国民食糧の安定供給や、自給率の向上を農業政策の基本とし

てきたようだが、過去において苦い経験をしたわれわれ農業者として、今後十分見守って行かねばならないだろう。

農村が、一番頼りとしている農協にしても同じことが言われると思う。直接農協の利益につながる販売・信用事業などには積極的な力を入れるが、間接的にしか利益にならない営農指導や、販売事業に、どれ程力を入れているか疑いたくなる。また、農協だけ大きくなって役人的動人に惰しては、農業と少しづつかけはなれていくように思えてならない。

一方、農村においては機械化による農業資本の投下で悪循環を繰返し、そのうえ、帳面一冊持たないで経営する迷経営者の多い農業が、この社会経済の荒波を乗り切ることもできるだろうか、われわれも反省しなければならぬ。

最後に、農村の指導者の方々に一言。まず畦道を廻りつつ経営生産の技術指導をお願いしたい。それから、農家が自分の生産物の原価ぐらいわかるような農業者を育てるべく、指導していただきたい。

(農業自営者)



不景気の中で想う

宇土市松山町 西田誠

世の中は、今非常な不況の中にある。右を見ても、左を見ても、不景気な話ばかりだ。気持ちが沈んでしまう。

だが思えば、この二十数年来、好不況の波は循環している。昭和二十八年の不況、その後、三十三年、三十七年、四十年、四十五年と、四十五年のサイクルがある。それからすると、四十九―五十年頃には不況の年がくることは当然、予想される筈である。少くとも企業を経営している考であれば、統計表を見る迄もなく、自分の肌で感じていたであろう。

高度成長の社会経済上昇期を夢みるのではなく、過去の苦況の時期を、正常な経営と思えば、今日の不況も来るべきものが来たという気になる。景気は少しづつ上昇する傾向にあるが、石油ショックに始まる、世界的なパニックは、今後よくなったとしても、過去の好況は、到底望めない。何とか、男

(会社社長)